九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容 : その評価の変遷

山根, 祥子

https://doi.org/10.15017/1500474

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	山根　祥子
論　文　名	日本におけるアルフォンス・ドーデの移入と受容 ―その評価の変遷―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　准教授　　西野　常夫 副　査　　九州大学　　教　授　　太田　一昭 副　査　　九州大学　　教　授　　阿尾　安泰 副　査　　九州大学　　教　授　　嶋田 洋一郎 副　査　　佐賀大学　　教　授　　相野　毅

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、１９世紀フランスの小説家アルフォンス・ドーデの作品が日本でどのように読まれ、どのような評価を獲得し、またどのような文学史的意義を持ったかという点について考察した論文である。これに近い内容の比較文学的考察は先行研究で行われているが、本論文はこれまであまり触れられていない大正・昭和期における受容についての考察を補い、ドーデ受容の様相と評価の変遷を総合的に検証している点にまず特色があると言える。

各章の概要は次の通りである。第１章ではドーデの文学が日本で受容された理由を、これまでしばしば語られてきた愛国心や自然主義といった側面からではなく、ドーデの作品でしばしば表現されている、失われつつあるものへのノスタルジーに対して日本人読者が共感したのではないかという仮説をもとに考察している。そうした考察を行なうために、第１節でノスタルジーの定義づけを行ない、第２節で、ドーデのノスタルジーの感情を助長したものに、幼少期の故郷喪失体験があることを自伝的小説「プチ・ショーズ」などを素材にして論証している。第３節では、ドーデが明治期にとくに受容された理由の一つとして、明治初期以来の青年の上京ブームへの反動としての、明治２０年代以降の田園ブームがあったのではないかと推測し、宮崎湖処子、徳富蘇峰、北村透谷などの故郷や田園に関する著作との関連性を検討している。第４節では、ドーデの作品群で故郷南フランスの風土がユートピア的なものにまで美化されていることを確認し、作家が抱くノスタルジーとの関係について分析している。

第２章では、日本におけるドーデ評価の特殊性を考えるために、フランスと日本におけるドーデの作品の評価の内実について考察している。まず第１節では、同時代のフランスの新聞に掲載されたドーデの風刺漫画、ゴンクールの日記、その他の資料をもとにフランスにおけるドーデ評価を確認している。第２節では、ドーデを、ドーデと同時代のフランスで隆盛した、エミール・ゾラに代表される自然主義に対抗する作家と考えた、ドイツの批評家ゴットシャルによるドーデ評価を検討し、日本の初期のドーデ受容に刺激を与えた森鷗外のドーデ評価との関係を考察している。第３節では、鷗外以後の明治・大正期の作家によるドーデの評価を検討し、第４節では、昭和の戦後になると、ドーデは子供向けの小説家であるとの評価が現れてくることを確認している。

第３章では、明治以降、ドーデのどのような作品が邦訳・出版されてきたかということを具体的に検証し、第１節で、一度も邦訳されていない長編小説が多くあることを確認し、第２節で、その一方で、子供向けの作品と受け取られがちな短編小説の邦訳が比較的頻繁に行われているということを確認している。また第３節では、従来しばしば問題にされてきた短編「最後の授業」の受容について英訳も含めて再検討し、邦訳の段階でフランス語原文にはない道徳的要素が加えられている

版があることを指摘し、学校における子供の道徳教育への影響について考察している。第４節では、「最後の授業」以外の教科書掲載作品に新たに注目し、教科書指導要領などとの関連を踏まえて、掲載の意図を探っている。

本論文の特筆すべき学術的意義としては次のような点をあげることができる。第一に、日本において、明治時代にドーデがよく読まれた理由の一端を田園ブームとのつながりという新しい視点で説明し、一定の説得性を得ている点。第二に、ドーデの作品が邦訳される過程で参照された可能性のある英訳の存在に注目し、仏英日の３言語間での作品の重要箇所のニュアンスの違いを分析し、読者の印象にどのような違いを生じさせ得たかということを明らかにしている点。第三に、ドーデの教科書受容の研究では従来「最後の授業」に焦点が絞られる傾向があったが、本論文では、他の短編についてもその教科書掲載の実態、理由、意義などについて解明されている点、である。

本論文について、ドーデについての日本人文学者による批評文などの一次資料をさらに広範囲に調査する余地があったのではないか、あるいは、日本文学への影響、またドーデの考えるユートピアについて、分析をさらに深める余地があったのではないか、等の指摘があったが、これらの問題点は本論文の価値を大きく損ねるものではないと考えられる。本論文中の様々な考察によって、日本におけるドーデ受容の実態とその意義について新たな知見が加えられていることは明らかであり、それらの知見はドーデ研究全般に対しても学問的寄与をなすものであると認められたため、本論文は博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。